さいたまトーク

楽しく食事 多様な交流

志木のまいにちこども食堂長　山下悦子さん(57)に聞く

子どもの7人に1人が貧困状態にあり、一人で食事する「孤食」も各世代で増えているとされる日本。その中で、低額や無料で温かい食事を提供し、だんらんの場にもなる「子ども食堂」が全国で広がっている。昨年3月に山下悦子さん(57)が志木市に開いた「志木のまいにちこども食堂」には、これまで約4千人が訪れた。10人で満員になる小さな食堂のキッチンから、どんな世相が見えるのか。

――志木市で初めての子ども食堂。地域に根付いた様子ですね

ここはみんなの食堂です。大人も子どもも、誰でも一緒に温かいご飯を食べて、だんらんの時間を過ごし、「孤食を防ぐ」「心豊かに暮らす」「子育てを応援する」という三つの需要に応える場所。だんらんの時間に宿題をする子もいます。

月曜日から土曜日（午後5～8時）の夕食（小学生300円、大人500円）と、学校の給食がない春休み、夏休み、冬休みや土曜日（正午～午後2時）の昼食（誰でも300円）を提供します。休みは日曜と祝日。利用者は月に200人前後で、大人と子どもの割合は半々くらい。親子連れが多いです。9割以上がリピーター。少し「根っこ」が張れたかな。

――「子ども食堂」には「孤食」や「貧困」というイメージがあります

実際は、もっと多様な地域の交流の場です。例えば、家庭内で孤立する母親がいる。親子だけの食事だと、子どもにガミガミ言って「煮詰まって」しまう。

そんな親子でも、ここなら他の人も一緒にテーブルを囲むから、子どもにガミガミ言わない。会話が生まれて親子の食事が楽しくなる。「だから来る」と言ってくれる利用者がいます。楽しく食事ができれば日常も楽しくなるでしょう。利用者との会話の中で、そんな手応えを感じる。この食堂が一助になっているのではないか、と。

食堂を応援してくれる地域の人たちの協力で、中高生向けの英語の勉強会を定期的に開いたり、紙芝居やバルーンアートなどのイベント会場になったりもしています。もっといろいろ利用してほしい。

――毎日食事を出す子ども食堂は全国でも珍しいと聞きます。人気のメニューは

から揚げ、ハンバーグ、ギョーザの日は、利用者が3割増しの感じ。ほかに、春巻きやコロッケかな。ごはんとみそ汁はおかわり自由。メニューは月末に翌月分を食堂のブログに載せたり、学童保育で児童にチラシを配ってもらったりしています。

10月の献立表はハヤシライス、さんま焼き、魚フライ、焼き肉丼など約20品目。毎日来る人もいるので、メニューが重ならないように、同じ種類のものは週内は出さない。ほかに、そば打ちが趣味の男性が提供してくれる本格的な手打ちそばなどもあります。

――今後の展望は

食堂の収支はとんとん。地域の人たちやボランティアの支えのおかげです。米や野菜などの食材を差し入れてくれて、米は買わずに済んでいます。食堂を利用してくれる人がいる限り続けていきたい。

周囲から「NPO法人にしたほうが運営しやすくなる」と勧められ、来年、申請しようか考えています。認められれば、市内にもう一つ、子ども食堂を開きたいです。

（聞き手・斯波祥）

地域で支え、収支はとんとん

やました・えつこ　1961年、埼玉県生まれ。群馬県立女子大卒。東京での出版社勤務を経て、出産を機に退職し、志木市へ。40代になって以降、市の民生委員や中学校の臨時教員などを務め、自ら準備資金をためて2017年3月に「志木のまいにちこども食堂」を開設、食堂長に。赤字への備えもあり、現在も小学校で特別支援教育の支援員として働く。

わがまち お宝館

戸隠

か

秋の深ま
長野市戸隠
燃えるよう
た。中心に
高は190
の辺りは5
の底だった
その名残
隠地質化石
のとってお

釘やブラシ
室＝いずれ

館内のあち
された戸隠